おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成28(2016)年
2月号
通巻546号
毎月23日発行
(題字　矢追日聖)

★発行日　平成28年2月23日
★発行所　大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)44-0015
★印刷　大倭印刷株式会社
★定価　1部　250円
年間購読料3,000円(送料共)
★郵便振替　01050-6-67002
大倭出版局
URL http://www.ohyamato.jp

新皇教宮の雪景色 平成28年1月19日　　群馬県安中市　西川弘二さん撮影（登美之郷だより・5頁）

平成4(1992)年2月23日　申孝祭法話より

申孝祭と大倭のお役目

法主　矢追日聖（満80歳）

神武天皇、大倭に参る

雪が降っておりましたけれども、朝からいいお天気で、太陽が輝いておって景色もよい非常に明るい朝でございました。

今日は申孝祭(しんこうさい)でございます。伝説といえば伝説だけれども、やっぱり神武天皇というのは霊界におりますから、まんざらウソでもなさそうです。

日本の天皇の一番古い第一代の天皇が神武天皇ということになって、それから今日まで百何十代と天皇家は続いております。

大倭はどうもこの天皇家と縁があるように思うんです。神武天皇が大倭へお礼に来て、御親祭、即ち天皇自ら神様をお祭りした。天皇家ではいろんな祭典がございますけれども、御親祭というようなのは、この時、大倭においてされたのが最初なんです。それが二月二十三日という日なんです。

現在におきましても、私が大倭の代表として生まれさせてもらっておりますが、どんな具合か十二月二十三日に生まれておるんですね。現在の天皇も十二月二十三日にお生まれになっておる。

また神武天皇が大倭の神さんに対してお礼のためにお参りになった記念日の二月二十三日に、現在の皇太子さんが生まれてはるんですね。何か知らんけれども、つじつまが合(お)うてるというんか、定まり事か偶然か分かりませんけれども、そう

いうことになっておるんです。

『やわらぎの黙示』の「日本精神の源流―長曽根邑のすめらみこと」の中に十二月四日の金鶏祭と、二月二十三日の申孝祭のことについて書いております。

神武天皇がヤマトに来て、戦争が起こった時、神武天皇の方に光が掲げられて、その結果、日本の第一代の天皇として位に付くことができた。それは大倭の神さん、つまり大先祖さんのお助け、お陰を非常にこうむったということで、それに対するお礼として大倭へお参りになった。「大孝を申べたもう」と『日本書紀』には書いてある。それで申孝祭という名前にしてあるんです。

そういうように神武天皇が基礎をつくって、天皇家が現在まで続いておるということになるんです。

旧暦を新暦に直すと、二月二十三日になるらしい。今日はそういう日なんです。

大和維新

ヤマト（倭）というのは、このあたりを中心として北はずっと天橋立の丹波丹後あたりから始まって、南の方は三重から和歌山の熊野の端までの近畿の中央で、それを統括しておったのが、「すめらみこと」である長曽根日子命なんです。倭（ヤマト）というのは親元のこと。それのもうひとつ大先祖というのが大倭、大親元ということになるんですね。

長曽根日子命が天皇であり、そこへ神武天皇（※名前はまだ狭野命）が九州から移動して来たんですから喧嘩が起こるのは当然です。

ところが伝説ですけれども、もうちょっと前に饒速日命さんが、神武天皇より一歩先に争いも喧嘩も何もなしでヤマトへ来てるんです。長曽根日子の妹さんと結婚して長曽根日子と手をつないでるんですね。結婚政策やな。長曽根日子命は饒速日命を偉大な天皇として仕えており、総理大臣のような形でこの近畿地区を総括しておった。だから、（※その後の歴代の）すめらみことになった長曽根日子命の大先祖は、饒速日命なんです。

ところが、次に西の方から出て来たのが神武天皇なんです。瀬戸内海を通って生駒山から予告なしに入って来たんですから、よその国が攻めて来たんだということで、これに対して迎え撃ちする。

結局、日下の戦いで神武天皇の軍はさんざん負けて、今度はずっと南の熊野の方へ廻ったんですけれども、長曽根日子命の勢力下ですからなかなか上陸することは難しい。

最後にはヤマトへ入って来て結局、長曽根の精鋭部隊と戦争になってしまった。『日本書紀』には「連に戦ひて取勝つこと能はず」。なんぼ戦っても勝つことができない。そういう時に天が曇って来て光が出たと書いてある。これはね、飛び火、トビというのは鳥やなしに飛んできた火ということ。霊魂のことです。

そういう奇瑞があったために、長曽根日子命は霊感によって、今、横から出て来た人がやっぱり出て来るべき人なんだ、向こうに譲れという神様のお示しなんだと受け止めて、ヤマトの軍を全部引いたわけなんです。

今度は交渉することになるんやね。神武天皇の方も天の羽羽矢や歩靫とかのしるし物を持ってきて、長曽根日子命の方も饒速日命から受け継いできておる天の羽羽矢など同じ物を持ってきた。すると「事不虚なりけり」で、結局両方の持ち物が完全に符合した。

そしたら長曽根日子命は神がかりですから、もうどっちが勝った負けたやなしに、政権を渡した。「大和」の国として第一代・神武天皇を即位させたのが二月十一日で、現在の建国の日という記念日になってるんです。けれども、そんな時分に今の天皇制みたいな即位も何もないんですよ。結局神祭りしたということです。

大和の南の方で即位したんですけれども、一年経っても二年経ってもヤマトの方が勢力強いからなかなか平和にならない。四年経ってようやく治まったというので、初めて神武天皇がここ大倭神宮の方までお礼に出て来られた。そういう意味においての今日は記念祭なんです。

平和の原点

私自身、大倭神宮で生まれてるんです。やっぱり人間生まれてくるには皆それなりのお役目というのがあるんですよ。私はえらいうぬぼれたことを言いますけれども、現在の人間と、過去において亡くなって霊界におる幾多の人達、例えば神さんとして神社とかに祀っていたとしても、霊界において心が治まってない人達を鎮めていくべきお役目があるんです。

霊界におる荒ぶる神々、霊魂を鎮めていく。それをすることで、現界のこの社会がだんだんと平和になってくる。言い換えますと、結局私は平和運動の仕事をやってるんです。これが一番の平和な世の中になっていく原点なんです。

大体、平安時代から源平時代の戦が始まり、時代が下るにつれて鎌倉時代にまた武士の時代になってくる。そして室町時代。戦争ばっかりで来て、最後に徳川時代になって武家政治がようやく終わるんやけども、一番土壇場へ来て大東亜戦争で日本が武力で負けた。これも神さんからすればお慈

悲なんですよ。

昔において武力でもって世の中を治めておった時代の人達は、権力者として世の中を制覇したい、自分が偉くなりたいという心で戦争して死んで、霊界におっても修羅道に入ってる。そういう霊魂の心を受け継いで生まれてくる人がたくさんおるんです。

大東亜戦争の時の陸軍大将とか、海軍大将とかいうような偉い軍人さんは、例えて言えば豊臣秀吉だとか、織田信長とかいうような武力制覇したかった人の心を受け継いで生まれてきた人やと思う。そんな霊魂が乗り移っとるわけなんです。

理屈で考えたら戦争とか人殺しというようなことが好きな人は誰もおりません。ところが宿命というかそういうような心を受け継いでくれば、やらなきゃいかんというような気持ちになってしまうんです。そういう人は有能やからだんだん社会的に地位が上がっていくし、軍隊作って上の位置になってくる。命令ひとつで大勢の人を動かすのが一番うれしいんです。

一般の兵隊さんはかわいそうやけども、上の偉い人の命令によって皆動かないかんし、徴兵は義務づけられたから、嫌々でも否応なしに戦争に行って死んでる人もたくさんおるわけなんです。

そんな人達の霊魂を鎮めていくというのが大倭の仕事なんです。それはね、簡単に言えば皆さん方も生きている人間同士お互いに理解しおうて仲良うしていく、また皆さん方のご先祖さんに対しても心からお祀りするということ。

昭和維新の人柱

大倭（みなと）というのは大親元ですから、昔の死んだ人の御霊はほとんど大倭の霊界におるんですよ。私はそういう人達を浄化浄霊していくようなお役目があるんです。

霊界の人が鎮まってくると、今度現界に生まれてくる人が平和な心を持って生まれてくる。自然に世の中が平和になっていくんですね。まあ気の長い話やけども。

大倭はそういうような宿命を持っている。そこへ、私自身も生まれてきているし、皆さん方もその一翼を受け持っていると思うんです。

皆さんが歌っておりました聖歌の最後の「昭和維新の人柱」というのは、何も川の中の人柱になって死ぬような意味じゃないんです。結局皆さん方が、霊の世界の人達を鎮めていかないといけない。生きてる自分も霊魂持っておるんやから、現界の人と霊界の人とが仲良うしていくということです。

何も偉い大神様に参ったからご利益あるのと違いますよ。ご先祖が皆さん方の一番身近な関係ですから、別に大倭のこんなとこまでわざわざ出て来なくっても、自分とこの仏壇で血を分けたご先祖さんだけでも、毎日形の物をちゃんとお供えして、心から鎮まってもらうようにお祈りする。

皆がそうなってきて霊界の方が鎮まってくると現界の方も鎮まってくる。生きている人達と死んでいる人達が仲良くしなければ現界もうまくいかないし、霊界もうまくいかない。

そうした時に平和な心を持って生まれてくるような子供さんが次々できてくるはずです。そうすれば次の家そのものが栄えますし、世の中が平和になってくるという因果関係があるんです。

だから、大親元である大倭の現界においての代表者として私がそのお役目で生まれさしてもらっている。昭和維新の人柱というのはそういう意味なんです。一人一人が自分のご先祖を大切にしていくことによって、結果、世の中が自然に平和になってくるんです。

政治家でも平和な人がトップになってくれたら世の中平和になるんやけれども。今のところは世界中が治まっておりませんし、日本も国際的ないろんな事情によってご苦労なさってると思います。一歩一歩平和な社会になるように、気のついた者からしていったらいいと思うんです。

皆様もお暇があったら『やわらぎの黙示』の中の「日本精神の源流」という一つだけでも読んでもらったら、よく理解ができるだろうと思うんです。

それ以外のいろんな事も書いております。一般人が常識で考えたら、矢追日聖は大分気が狂ってるなというようなことを書いてますけれども、私自身の体験談を書いているんやから、それはウソじゃないんです。読んで分かる人には分かるけれども、分からん人には気違いにしか思えない。

けれども真面目に読んでください。あんた達が分からんでも、血のつながっているご先祖は大親元の大倭に関係があるんやから、それを読むことによって必ず喜んでくれると思います。

だからいつも本を読む時にご先祖さんを念じて読んでください。必ず皆さん方にうまくいくだろうと私はそう信じてます。

霊界からの指図のままに

大倭教というのは宗教団体の名前ですけれども信者を一人でも増やすというような、そんなけちなこと考えてませんし、また一人でも余計に参ってくれたら大倭が発展するから結構やとか、そんな商売気もありませんしね。

私は本当に純然たる宗教人としての気持ちで仕

事しております。霊界の人達がいろんな事を指図してきますので、人から気違いと言われてもどない言われても、その通りに素直に実行してます。

例えばね、らい病・ハンセン病というのあんた達知ってますかね。昭和四十年か四十二年頃、ここでそういう人達を受け入れて宿泊したり話し合いしたりする家をつくると言うて、地元の住民に反対されました。私は気違いみたいに言われ、二重にも三重にも取り囲まれて、「止めよ」と随分言われました。けれども光明皇后にやってくれと言われるから、もうアホになってやりましたけどね。

いろんな事があるけれども、私はとにかく霊界の人達がこうしなさい、どうしなさいと言われたらその通りにやっておるんで、その片鱗は本の中にみな書いております。あんた達がその本読んでもらった時に、霊界との一つの交流もできるだろうと思うんです。

私は研究して書いておるんじゃなしに、自分の体験談を書いておるんですから、真面目な霊能者、霊感者がおれば、その本を見た途端に必ず頭が下がる時があると思います。うぬぼれやなくてね。

全部霊界からの指図によって、どういうことを言え、どういうことを書けと言われるから書いておるんで、私の知識とか自分の考えを言うてるんじゃないんです。

昭和二十二、三年の頃は、ほとんど夜通しで書いてます。その時々にいろんな霊界人が出て来て、ぐるりからがちゃがちゃ言うてくる。それを頭の中で切り替えてまとめて書いておるんですね。

だからあんた達が読む時にそんな心で読んでもらったら、その時に私のとこに出てきた霊界の人達の心が、またあんた達に感応すると思います。そういう意味で真面目にいっぺん読んでください。必ず悪くはなりません。気違いにもなりませんわ。

宗教は心の練磨

この頃のテレビを見てると気違いみたいなのようけ出てきましたけど、見ているとちょっと商売気を感じるんです。こんなこと言うたらえらい邪魔するようやけど、あんなもん信じたらあきませんで。私の場合だったらあんなこと言うてるんであれば、絶対命がないね。

だんだんと信者が増えて大倭教が有名になってえらいお堂でも建てたら、私はもう生命がなくなっておしまいです。

私が生きてる間には滅多にできませんけれども、死んだ後において、もしも仮に、世間並に宗教団体を大きくしたり、大きなお堂を建てたとしても、私は火をつけて焼きますよ。そんなんほんまかと思うやろけど、霊界でちょちょっとしたら、そこから火が出てくるんですよ。私はやりますよ。

生きてる時はこんなやさしい男やけど、死んだ後の大倭はちょっと怖いと思います。だから皆さん真面目にやってほしい。

とにかく一人一人縁がある人ばっかり集まってるんやから、人間として仲良うしてほしいんですね。自分が偉いんやとかあかんとか、あるいは人に対して卑下するとか、優越感や劣等感そんな心をなくして、自分も人なら彼も人、同じように大倭の舞台でこうしてお互いに仕合わせに生きさしてもらってるんやから、皆仲良うしましょう。

顔は一人一人皆違うし、姓も違うけれども、あんた達の先祖さんをさかのぼっていったら、大倭にご縁がある人ばっかりですよ。ご先祖さんにご縁がなかったら大倭へ滅多に来られません。ここはそういうとこなんです。

宗教は心の練磨なんですから、そういう意味で仲良うして、自分の心そのものを磨いていくようにしてほしい。ほんまに仏さんみたいな気持ちになってこそ、皆さん方大倭へ出てきた値打ちがあるんでね。

祭典の意味

今日は普通の月次祭でもありますし、また神武天皇が大倭にお礼に来られたという記念の日でもございますけれども、皆さん方たくさんお見えになってるので、私はびっくりしました。何もこんなぎょうさん来んでもええのになと思ってますねん（笑）。まあにぎやかで結構です。

祭典行事は、私は遊びと思ってます。何も神さん拝んでご利益もらおうというようなそんなけちなこと考えたらあきませんで。皆お互いに楽しく遊ぶという日なんです。

お供えしている花でも皆さんに供えてもらった品物でも、神さんにお供えしてるんと違うんやで。皆あんた達の方に向いてるやろ。あんたらに供えてるねん。正面に神さん集まってると思ってるかしらんけれども、こんな窮屈なとこに滅多に神さん座ってません。霊界の人はあんた達が座ってるこの中に皆おりますねん。

だから祭典が済んだ後は直会（なおらい）と言うて、お供えしている物は皆で分けて楽しく食べる。形の物を人間が食べることによってご先祖さんも一緒に食べて喜んではるんです。霊界の人には形の物をお供えして、形の物を通して生きてる我々の心を供えるんです。そういうのが祭典なんです。

皆さん方も霊界の事もよく知ってもらって楽しく遊んでほしいと思います。（文責・編集部）

登美之郷だより

平成元年（1989年）
『とみのさと』創刊号より再録

新皇教宮の創設

法主　矢追日聖（満77歳）

順逆の奇縁

このたび群馬県安中市原市一八九五番地中村文太郎氏住居地に、当大倭教の教導所として「新皇教宮」を創設する運びとなった。大倭への道はかなり厳しいものがあったようである。

昭和六十三年三月六日大倭神宮での月次祭に馬場美佐子（川越市51歳）と石川千鶴子（東京都47歳）の姉妹が詣られた。そのきっかけは東京都町田市に住む得田寿之さんの紹介によるものだった。

彼女らと氏は去る二月十四日東京の将門公の首塚にお詣りして出会ったようで、その時彼女から霊的障害で一族が悩まされているので今日も此処へお詣りに来たということ、この話を聞いた得田さんは大倭の話をしたところ姉妹は早速三月六日の月次祭に大倭神宮へ詣られたのである。合縁奇縁という言葉は古くから使われているが平将門公の命日と言われる二月十四日、しかもその首塚と伝えられた因縁の場所で大倭を紹介されるということは正に奇縁と言わざるをえないのである。

人格霊武将の示現

神宮での祭典は午後二時からである。顕祭（声を出し、形をもっての儀礼）は大倭では至極簡略に執り行うのが常であるが、幽斎は法主が霊界資格をもって独り厳粛に霊界人と共に執り行うのである。今日は関東から姉妹が見えているためかも

あじさいアルバム⑯

「大倭大本宮伝承の紀」の周辺

昭和43年５月23日『すさのお』第20号表紙の陶棺と法主様の説明文（法主満61歳）

「…はにわと同じ焼きの土棺で…脚は八個あって胴が中央で切断されているが両者を合わせて埋葬している。…副葬品は少数の須恵器の外は何もない実に簡素なお墓である。河内枚岡から暗越奈良街道を東へ進む富雄川のほとりに砂茶屋がある。更に一キロ程ゆけば左に丘陵が続き熊取という。この丘の麓で千有余年の長き歳月この土棺は静かにねむり続けてきた。土管は何も云わない。しかし、埋葬時に参画した多くの古き人々の想念が今の我々に何かを知らせている」

「…もう三十年程前だが、私は私の所有地に新道をつけさせた。土師(はじ)の破片が見えたので注意すると、奈良朝頃の陶棺の埋まっているのが見えた。工事は停止して家の出入りの人足を連れ写真機や実測の道具を用意して現場へ赴いた。…二人の弟を手伝わせて私が掘ったのである…」

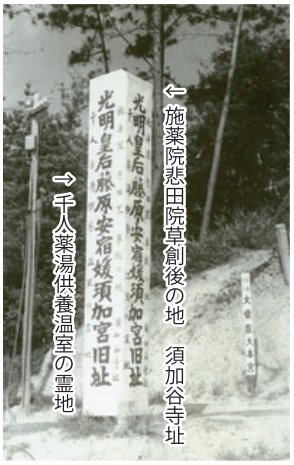
（…個所省略）

（前列）法主様のご両親、
生母フジエさんと矢追隆蔵さん
（後列）法主様と鈴月かあさん

昭和６年春、学部一年度入学、21歳の法主様

現在の拝殿の所に建てられた標柱、及び日妙師（生母さん）

平成元年４月２日、藤之木公民館で法主様の講演「藤の木の話を聞く会」



昭和36年２月13日、紫陽花邑東側宝来口に建てられた標柱（写真裏に昭和34年７月７日の日付。その頃作られ別の場所にあったらしい）

同所で、法主様とコックス女史（昭和38年）

知れないが、珍しく源平時代の荒武者（八階座）の強烈な霊波長を感受した。念と念とで会話交流を行った。直感では平将門公ではなかろうかと閃いた瞬間「武士の情、どうか現世での俗名は秘めてほしい」と哀願の念が返ってきた。尚この武将霊は自分の棲息霊地を無情に荒らされたので一寸呪罰を与えたが、中村家一族の縁で大倭にて救われることになり、これに勝る果報はないと礼を低くして感謝された。勿論その取巻きには大小色とりどりの一族郎党の霊波が渦を巻いていたが、一族が大倭太加天腹にて鎮魂の座を設けることを宣言すれば騒音が納まって静寂となった。

祭典が終了して参詣者は社務所の居間に入り休憩する。茶菓が出され一息いれてから、遠来の馬場・石川姉妹を先ず招き、今日詣られた要件を聞くことにした。要約すれば、姉妹の生家は安中市の前記中村家であって、その屋敷に纏わる霊障害や神罰の実例を挙げて話された。聞いていると石碑も沢山あるし昔の神社の跡らしいような話だった。彼女の父が文太郎氏で、この屋敷には古木も沢山あったようだが伐採した人は急死するとか恐ろしくて父は祈祷師や行者、修験者らに祓い清めの修法をたのんだり、色々と手を尽くしかなり散財もしたようだが、やはり霊験は無かったようである。写真で見ると神殿があり、鳥居もあり、又新しい五輪石塔もあって一家の苦悩の深さが想像できたのである。今日の祭典に出現した武将霊の心を汲取れば中村家とは切っても切れない深遠な因縁があるので、大倭でみ玉鎮めを行ってお社に祀らねばならぬと感じたのである。然し中村家ではこの手で色々と迷わされ浪費もあったことだから話し難いものがあった。でも話せば心よく承諾されたので安堵の胸をなぜおろすことができた。

この武将霊の在世では誰であったか不明として、霊体に対し大倭の座では「将玄坊大善神」とこの日を縁に法主が命名したのであるが、この武将霊は喜んで拝受すると厳かに謝礼を宣べられていた。

鎮座の証である小型のお社を馬場・石川姉妹が三月二十一日お迎えに参られ、更に八月二十五日には父文太郎さん（母きよさんは入院中）長女馬場美佐子さん、長男中村孝明さん、次女石川千鶴子さん、四女桜井節子さんに紹介者得田寿之さんの六人が揃って大倭へ詣られたのである。

この時、中村家の屋敷は人格霊の棲息する霊地だから霊人達（武人）とは永遠に仲良く交流しながら暮らさなければならない深い深い因縁の地だから、この屋敷は永久に霊地として保存保護しなければならない土地である。その責任は中村家に在るようだ。この土地が個人所有であれば代が変わるとき若し相続権などのことで難題が持ち上がって神罰を蒙ることにでもなればお気の毒と思うので、この地は宗教法人に寄附し代々その代表役員がお給仕することが最も望ましいと思う。この霊地の所有は宗教法人であり、この法人の代表役員は代々中村一族が就任すれば霊人達も中村家の御先祖達も喜ばれるし、この霊地にて霊人達の強い霊威を背景にして、大倭教の理念に基づく人間形成の指導教化という聖業に挺身されることが肝要であることを話したのであるが、皆よく理解されたようで嬉しく思った。

大倭教について

昭和二十年八月十五日、終戦の日、大倭神宮にて立教開宣し、神示により「大倭教」の名乗りをあげた。同二十一年の七月に文部大臣認可による宗教法人大倭教を設立したのである。法人規則目的第三条に、この法人は教祖矢追日聖の立教開宣の本義に基づき、大倭太加天腹の大法を奉載して、大倭教の教義をひろめ、古神道の復活宣揚をはかり、祭祀行事を行い、信者を教化育成し、神宮及び教宮を包括し、その他この教団の目的を達成するための財務その他の業務を行うことを目的とする。

となっている。これは宗教法人設立の目的であるが、大倭教の教理は、

万物一切、生成化育の大祖神、太加天腹大神に報本反始の祈りを捧げ、大宇宙の神ながらの法に知覚順応し、神人冥合、法味悦楽の境涯に悟入せしめ、もって、物心豊かで和やかな家庭、社会を人類にもたらすことを教理となす。

右の如く大倭の御本尊は、大宇宙創成の生命体で、自然神として太加天腹大神（神示）と申している。この神が宗教的信仰の唯一の対象神である。神社その他に祭祀されている人格霊その他もやはり太加天腹大神の分神である。故に我々と相互扶助の相関関係において、仲よく交流する小神であるから宗教的信仰の対象者ではないのである。

我々は大自然の摂理、自然界の妙不可思議な仕組みを把握し悟るのが「神ながらの法」であり、その自然界の実相を日常生活の中に生かし実践して行くのが「神ながらの道」である。大倭の指導の原理はこの「法」と「道」に在る。

大倭教信人実践要綱は、**一、敬神崇祖　一、神人冥合　一、顕幽不二　一、普遍平等　一、慈善博愛　一、相互扶助　一、協和勤労**となっている。

参考までに記述したのであるが、尚霊示によって創設した財布一つに釜一つという生活共同体、大倭紫陽花邑（昭和二十二年発足）の三つの信条は今もなお大倭の人々の胸に脈々と生きているので、これを明記して擱筆することにする。**一、地下水の精神　一、心身の健康　一、相互の扶助**

（平成元・十一・六　日聖記）

大倭千一夜（其の二十四）　昭和41（1966）年10月23日発行『大倭新聞』第24号より再録

狸さんの一騒動（下）

――徒然なるままに心霊のくさぐさを喋る夜ばなし

法主　矢追　日聖（満54歳）

異様な空気

あれから十五年、宏さんは結婚もし子供もできている。幸福な家庭である。

どういう浄霊の方法で治したかと聞かれても、一寸返事に困るがね。実はこれについて脇の下から汗が出る思いをしたので、その実況をお話しすることにしよう。

先程話した二十六年の十一月十日、今井さん宅で宏さんには狸霊の障りがあると言ったことがもとでね――今井さんは村会議長や民生委員常務などをしてきた人だけに、県下では実に顔の広い人なんです――この立場の今井さんが、勿論、宏さんの病気を心配しての善意で言ったことが、かなり広く噂になりましてね。

「あんな病気、どんな神様へいっても治るもんか。大倭の先生なら一発や……」。自信満々で公言したようです。

世間では三年間手を尽くすだけ尽くしても駄目な病人でもあるし、反面、今井さんに大恥かかせようという魂胆もあったのでしょう、そんな偉い神様がいるのなら是非とも来てもらおうということになったらしい。

こんな面白からぬ空気が村中に漲っていることを知らずして、約束の日、つまり十二月四日、金鶏祭だったので大倭神宮のお祭りを終えてから私は赴いた。もう暮れかけていた。

今井さんに案内してもらって、徳田さんの門口を入ると、異様な静かな緊張した雰囲気で私を無言にして迎えている。これはこれはと、思わず声が出たよ。

ぎっちりと居据わる面々は、親族始め、青年団の幹部、民生委員、それに近所隣りの人々や、野次馬連である。脇の下からほんとに冷汗が出ましたね。「一発」という前ぶれがあるんでね。

広い土間があって、それに続くオイベ（居間）の正面の壁を背にして、宏さんは一点を凝視してアグラをかいて座っている。相撲と百姓で鍛えたがっちりした体躯は不動明王像を思わせるものがあった。大勢の人々は、彼を大きく取巻いて座っている。静寂そのもの……。

中央には大きな火鉢がおいてある。私はつかつかと火鉢の前に座って彼と相対した。何にも言わないでニラミッコを続ける。

二十分ぐらいにらんでいたろうね。彼の腹のあたりで、狸霊が動き出したのを見た。

しめたと思った時、宏さんの唇がやんわりと動く、すかさず私は手招きをした。長時間微動もしなかった彼が、スーと火鉢の向かいへ寄ってきた。

霊と話す

私は憑依霊に語りかけた。その答は彼の口を使って、人間の言葉で話し合うんですよ。私は問う、彼は喜んで答える。

「こんな真面目な青年にとっついて、なぜいじめるんや？」

「青年のやつ、村の池普請の時、俺たちが棲んでいる塚の土を採った。その時、あいていた穴を見つけ、これは狐か狸の穴やと言って枯草に火をつけ、穴の口でくすべやがったからよ」

「この青年がやったからついたのか？」

「いや、ほかの者だ。けれど、こいつ（宏さんは）おとなしくニヤニヤ笑いながら立って側で見ていやがったが、つきやすかったからだ。俺らの棲んでいるとこは、ウマハギ場といって筒井順慶の見張場（砦）だった。俺らが守っているとこを荒らしにきたんだから仕方がないさ」

「話は分かった。このついた縁によって、これからこの家の守護にお前を祀ってやるから、分かればさっさと退散せよ。よいか」

宏さんの手は静かに私に向かって合掌し、崩れるように深く頭を下げた。暫くすると、頭を横振りにしてもち上げ、キョトキョトあたりを見廻して、「今日は、大勢が私のうちに集まって、一体なんだね」と、三年目に我にもどったということですね。

本人の驚きは勿論だが、参集している大勢の者、誰一人、宏さんが正気に戻ったなんて信ずる人は無かったんですよ。彼の叔父に当たる近所の人が、わざわざ宏さんに言付けて煙草を取りに行かせたりしたが、全然異状はなかったんです。理屈屋の人々もただ、「不思議なこともあるもんだ」と話しながら、こそこそと何時とはなしに帰っていった。

宏さんは友人から話を聞いて恥ずかしかったのか、外へは一歩も出ずに納屋で枝豆を落としていた。

正月になって、私の所へ年始の挨拶に来たのが、外出の始めだったんです。

あじさい日誌

1月11日　朝9時半から西斎庭で正月の神飾り物などを火に上げる大とんどが行われました。恒例の大根炊き・ぜんざい・焼いも・フレンチトースト等も。

午後2時半から教務本庁で『おおやまと』の編集会議。

1月15日　午前10時半から大本宮拝殿で大倭殖産㈱の事業関係者の「大倭安衛協力会」70名近くの方々が今年一年の安全祈願祭を行いました。

午後2時から大倭神宮月次祭。

1月16日　奈良パークホテル・萬佳で、午後4時から邑交会の新年会が開かれました。

午後、交流の家でFIWC定例委員会。

1月23日　大倭大本宮月次祭。

この日は昭和52年1月のご法話をお聞きしました。(『おおやまと』昭和52年1月号に「年頭に思う」として掲載分)

昇ちゃんもだんだん欲がなくなったか？　お年玉で懐が温い状態が長続きしてご機嫌です。

2月2日　教務本庁で玉緒祭用の豆を煎ること3時間。数日間は残り香がありました。

鹿児島県のハンセン病療養所星塚敬愛園の義久勝さん(74歳)が、オートバイで和歌山の友人を訪ねる途中、交流の家に1泊。昔から聞いていたので死ぬまでに一度来てみたかったと。

2月3日　大倭大本宮で玉緒祭が行われました。この日は昭和52年2月3日の法話をお聞きしました。(『おおやまと』平成12年3月号に「玉緒祭の日に節分の由来を聞く」として掲載分)

この日朝、25年以上前に購入した拝殿の灯油ストーブが故障、ついにお役ごめん。法主さんがよく「物にも命がある」と言われましたが、玉緒祭という命の祭りの日の出来事でした。

2月6日　大倭神宮月次祭。

夜、大倭会館で邑倭の会。

2月9日　午後1時40分法主奥津城にてご挨拶のあと、2時から拝殿において法主帰幽祭。

この日は平成2年12月23日日聖祭の法話を映像で見せて頂きました。(『おおやまと』平成3年3月号に「宿命について・美津留気について」として掲載分)

大倭安宿苑では

(菅原園)

2月3日　節分。豆に見立てた玉入れの玉を、鬼に扮した職員に投げて厄払いをしました。

(須加宮寮)

1月13日　喫茶クラブでサンドイッチ作りをしました。

1月26日　季節の歌や懐かしい歌を楽しみながら音楽療法。

(長曽根寮)

1月18日(デイ)　新年会。お鍋を食べて、ビンゴゲームや職員の出し物「二人羽織」で大笑い。また百歳になる方のお祝いも。

1月18日(特養)　新年会。昼食の寄せ鍋で温もりました。

1月21日(特養)　誕生会で8名(内米寿1名・白寿1名)の方のお祝いをしました。

(茂毛路園)

1月19・20・25・27日　ちぎり絵の集い。題材は職員が下書きをした葛飾北斎の赤富士です。

(八重垣園)

1月15日　花びら餅で初釜。

〈俳句〉「白梅のみ空仰ぎてメールボックス」「勤行のわが背に春の陽射し受く」「集ひの和友のソプラノ早春賦」

青山日元さんが帰幽されました

平成28(2016)年1月25日午前7時、2・3日前から入院中だった大倭病院でお亡くなりになりました。元の名前は富雄。大正3(1914)年、甲寅歳の6月21日生まれで、101歳6カ月。法主様に相談して生前に自分で決められた法名は、神倭日元次郎確之命。

大本宮拝殿に於いて、教長・矢追家麻呂さんを祭主として、1月26日午後7時から前夜祭、27日午後12時半から帰幽祭が執り行われました。

ボランティアグループ

「あじさいの箱」
第33回懇親会

平成28年3月26日（土）11時～14時

■ 大倭会館にて
■ 会　費：1500円（昼食代）
（昼食要予約　且田0595-68-4108まで）
＊大倭安宿苑事務局長・矢追明昌さんのお話
＊活動報告他

編集後記

▼『おおやまと』紙に文章を書かせていただく様になって二十数年、編集部員ということになって三年、初めて「編集後記」を書かせていただく事になりました。何とはなくありがたい(?)気分です。

▼法主様が帰幽されてちょうど二十年。その節目の年に青山日元さんも帰幽されました。既に幽界に帰られた大倭に縁のある多くの方々がますます身近に感じられる今日この頃です。

そんな折、今月号の『おおやまと』の紙面はすべて法主様が述べられたり、お書きになったものばかりで占められました。これは編集部が意図したわけではなく、正に無計画の計画という成り行きです。今号には何時にもまして法主様の想念が籠もっている様に感じられます。心してお読みいただければ幸いです。(修)

あんない

＊月次祭（大倭神宮）
3月6日(日)　午後2時より大倭神宮にて。

＊大倭会主催第566回禊会
3月13日(日)　午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

＊月次祭（大倭神宮）
3月15日(火)　午後2時より大倭神宮にて。

＊月次祭（大本宮）
3月23日(水)　午後2時より大倭大本宮拝殿にて。